

イズミノオト

チェロ・コーディネーター
吉岡 知広



©Masafumi Tamura

ヴァイオリン
植村 太郎



仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科(共学)を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライプツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ピバホールチェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C.ギガの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京クアルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。

ピアノ
浜野与志男



©Shigeto Imura

日本音楽コンクール第1位、マルメ北欧ピアノコンクール第1位ほか、2013年仙台国際音楽コンクールセミファイナリストおよび聴衆賞を受賞。日本フィル定期公演やヨーロッパ各国、アメリカ、ロシア、日本各地でのリサイタルをはじめ国内外にて演奏活動を展開する。東京藝術大学音楽学部を経て英国王立音楽大学大学院モスクワ音楽院にて研鑽を積む。現在は演奏活動の傍ら東京音楽大学ならびに東京藝術大学音楽学部にて後進の指導に注力している。



確かな信頼 これからも
70th ANNIVERSARY
仙台銀行

仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通じて、地域の文化活動を支援しています。

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ
コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね!”してください。
URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>



「プログラム」

チャイコフスキー

アンダンテ・カンタービレ(チェロとピアノ版)

四季 作品37b より 4月「松雪草」、5月「白夜」、11月「トロイカ」

懐かしい土地の思い出 作品42 第3曲「メロディ」

ワルツ・スケルツォ 作品34

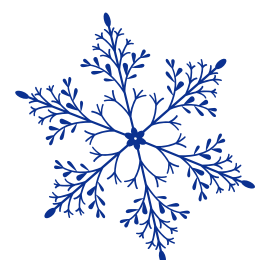
ピアノ三重奏曲 イ短調 作品50 「偉大な芸術家の思い出に」

新型コロナウイルス感染予防のため、ご協力をお願いいたします。

- 37.5度以上の発熱や咳、咽頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚の喪失等の症状がある方は、ご来場をお控えください。
- ご来場の際は必ずマスクを着用いただき、こまめな手洗い、手指消毒などの感染予防にご協力ください。
- チケットの半券にお客様の氏名・電話番号をご記入ください。万が一、会場で感染者が出た場合は、連絡先を保健所等の公的機関へ提供させていただきます。あらかじめご了承ください。
- 新型コロナウイルス接触確認アプリのインストールを推奨します。
- お客様同士の距離の確保をお願いいたします。
- 時間に余裕をもってお越しください。
- 会場では大声での発声はご遠慮ください。
- 退場は順番にご案内いたします。
- 出演者・関係者へのプレゼントおよび、お客様のお荷物のお預かりはできません。
- 出演者・関係者への面会はお断りします。

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
イズミノオト 第6回 チャイコフスキー 偉大な芸術家ノ思い出に

ヴァイオリン
植村 太郎



2021
11 / 28 (日)

【開演】午後3時(開場 午後2時30分)

【会場】仙台銀行ホール イズミティ 21 小ホール
(仙台市営地下鉄泉中央駅北3出口すぐ)

【入場料】全席指定 3,000円

(市民文化事業団友の会料金 2,700円)

※未就学児はご入場いただけません

2021年9月15日(水)一般発売

チェロ・コーディネーター
吉岡 知広

ピアノ
浜野与志男

Pyotr Il'yich Tchaikovsky

【プレイガイド】仙台銀行ホール イズミティ 21、日立システムズホール仙台(10月1日から取り扱い)、藤崎、仙台三越、ロウンチケット(Lコード:22494)
【チケットに関するお問い合わせ】仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30 ~ 17:00)
【公演に関するお問い合わせ】仙台銀行ホール イズミティ 21 TEL:022-375-3101(9:30 ~ 19:30休館日を除く)
【主催】公益財団法人仙台市市民文化事業団、KHB東日本放送 [企画制作]仙台銀行ホール イズミティ 21、HAL PLANNING
[協力]日本音楽財団(日本財団助成事業) [協賛]仙台銀行

チャイコフスキーについて 私たちが知っている わずかなこと

文 吉川和夫(作曲家、聖和学園短期大学学長)

チャイコフスキーが、日本のみならず、世界的に見ても最も人気の高い作曲家のひとりであることは疑う余地がありません。6曲の交響曲とりわけ第4番から第6番までの3曲は管弦楽の恒常的なレパートリーになっています。ヴァイオリン協奏曲の3つの楽章は優しく温かな旋律、誰もが共感できるであろう寂寥感と孤独さらには心浮き立つ生命の躍動が、聴き手の心に寄り添います。また、ホルンの力強いファンファーレを合図にピアノ独奏が力強い和音で満たす上に、弦楽器によって奏でられる堂々たる旋律。ピアノ協奏曲第1番の冒頭からは、一度聴いたら忘れられないインパクトを受けるでしょう(ただその堂々たる旋律、実は第1楽章の「序奏主題」に過ぎず、二度と同じ形では戻ってこないという、破格の構成を取っているのです)。さらに、3つのバレエ音楽「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」は、バレエを支える音楽としてだけではなく、視覚的要素無しでも十分に楽しむことができるという点で、バレエ音楽の在り方を変えました。チャイコフスキーのバレエ音楽は、後のストラヴィンスキー3大バレエ作品「火の鳥」「ペトルーシカ」「春の祭典」とともに、ロシア・バレエを不朽のものにしています。また、ロシアの国民的作家プーシキン原作によるオペラ「エウゲ

ニー・オネーギン」の音楽の豊潤さについて、ある作曲家は「貴腐ワインの芳香のような」と評しました。まさに言い得て妙です。

歴史に名を刻む作曲家の多くは知られている以外にも膨大な量の作品を作曲しています。その量が多量にも膨大すぎて全容がわからないJ・S・バッハはさておき、モーツァルトでもベートーヴェンでも、よく知られていて頻りに演奏される楽曲よりも、現在では演奏されることのない作品の方が多いです。それらは、若書きの断片やスケッチとして書き留められ、後に別の作品の母体となったものなどありますが、作曲家として自立してから完成されたにも関わらず忘れ去られてしまった作品、やや完成度の劣る作品などが、どんな天才的な作曲家であっても多数残されています(余談ですが、全作品のうち演奏されないものが少ないと言われているのはショパンです)。

チャイコフスキーの場合、最後の作品の作品番号が79で、大作曲家の作品番号としては取り立てて大きな数字ではありません。しかし、3幕のバレエも4幕のオペラも作品番号はひとつ「6」の歌曲といったいくつかの曲からなる作品にも作品番号はひとつしか振られておらず、さらに作品番号のない曲もたくさんあるので、チャイコフスキーが実際に作曲した曲は、かなりの量にのぼっているのです。

チャイコフスキーの音楽の多くの部分からは、集中して一気に書きとめたような勢いが感じられます。同時に、和音進行の工夫や思いがけない転調の連続が見られ、非凡な閃きとともに、チャイコフスキーが非常に高い技術を備えていたことがわかります。多くの作品は非常に短期間でまとめられました。例えば、交響曲第4番とオペラ「エウゲニー・オネーギン」は平行して作曲され、10か月ほどでほぼ同時に完成させていますし、ヴァイオリン協奏曲は11日間でスケッチを取り、2週間以内に管弦楽のスコア(総譜)を完成させたと伝えられています。

ほぼ同世代のロシアには、作曲家集団「ロシア五人組」(パレキレフ、キュイ、ムソルグスキー、ボロディン、リムスキー・コルサコフ)がいました。反西洋、反アカデミズム、反プロフェッショナルリズムを掲げて活動していた「ロシア五人組」に対し、チャイコフスキーは、「近代ロシア音楽の父」グリシカの影響を受け、時に民謡などの民族的な素材を扱うという共通点はありませんが、「ロシア五人組」とは一線を画しています。チャイコフスキーはアントン・ルビンシテインによって設置されたばかりのペテルブルク音楽院(現在のサンクトペテルブルク音楽院)で西洋音楽の研鑽を積んだ職業音楽家でした。不滅の作品創作を自らの使命として努力し続けた過去の大作曲家たちにならって「靴屋が長靴を作るような」技術を備えた職人、職業音楽家たらんとしたのが、チャイコフスキーの創作に対する基本的な態度でした。

チャイコフスキーの音楽は、交響曲をはじめとして管弦楽で演奏されるイメージが強いのですが、それは作品数にも表



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー



ペテルブルク音楽院

1840年 4月25日 ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー、ロシア中部の都市ウオトキンスクに生まれる。

1862年 創設されたばかりのペテルブルク音楽院に入学。アントン・ルビンシテインから作曲を学ぶ。

1866年 モスクワに赴き、アントンの弟ニコライ・ルビンシテイン邸に寄宿する。

1871年 弦楽四重奏曲第1番初演。

1875年 ピアノ協奏曲第1番初演。月刊誌のためにピアノ曲「四季」を書き始める。翌年完成。

1876年 8月 第1回バイロイト音楽祭に立ち会う。

1877年 8月 富豪の未亡人ナジェージュダ・フォン・メックとの文通がはじまる。

1878年 バレエ「白鳥の湖」初演。

1881年 3月11日 ニコライ・ルビンシテイン死去。

1882年 バレエ「眠りの森の美女」初演。

1890年 「偉大な芸術家の思い出」を完成。

1892年 バレエ「くるみ割り人形」初演。

1893年 10月16日 交響曲第6番「悲愴」の初演を指揮。

10月25日 チャイコフスキー死去。
※日付は旧暦(ユリウス暦)で記しています。



ナジェージュダ・フォン・メック夫人



ニコライ・ルビンシテイン

れています。管弦楽曲、管弦楽を伴う舞台作品、独奏楽器と管弦楽による協奏曲等は、作品番号が付けられているものだけでも42作品。それに対して室内楽曲は6作品にとどまりません。6作品の内訳は、第1番から第3番までの弦楽四重奏曲、ヴァイオリンとピアノのための3曲からなる「懐かしい土地の思い出」(ピアノ三重奏曲)、そして「フレンツェの思い出」と題された弦楽六重奏曲です。作品数からみても、チャイコフスキーの室内楽曲を聴く機会はいくらでも多くないということになります。弦楽四重奏曲第1番作品11の第2楽章だけは例外でしょう。速度発想標語がそのまま固有の曲名となった「アンダンテ・カンタビレ」です。ロシア西部の町カーメンカで書き留めたウクライナ民謡を模したと言われるこの穏やかで美しい音楽は、文豪トルストイをも涙させ、チャイコフスキーの名声を外に広く知らしめる名作となりました。

チャイコフスキーの室内楽曲で最も存在感ある名作が、ピアノ三重奏曲「短調」偉大な芸術家の思い出に作品50です。「偉大な芸術家が示すのはチャイコフスキーより5歳年上のピアニスト・音楽教師であったニコライ・ルビンシテインのこと。ニコライの兄アントン・ルビンシテインは、フランスリストと並び称されたピアニスト・作曲家であり、先に述べたようにチャイコフスキーの師のひとりでしたが、弟ニコライはチャイコフスキーにさまざまな活動の場を用意するなど、良き理解者・演奏者でした。モスクワ音楽院関係者を総動員して、オペラ「エウゲニー・オネーギン」の世界初演を実現させたのもニコライでした。一方、ニコライがピアノ協奏曲第1番について、「陳腐で低俗、演奏不可能と断じたエピソードはよく知られています。全面的に書き直すべき」というアドバイスはチャイコフスキーは受け入れず、ドイツの指揮者ハンス・フォン・ビューローの尽力によって初演は成功しました。その後ニコライは、批判的な意見を撤回し、指揮者またピアニストとして、ピアノ協奏曲第1番の理想的な演奏者となって、作品の真価を広める大きな役割を果たしました。

時に音楽観が対立し、敵意に似た感情を抱いたことはあっても、チャイコフスキーにとってニコライは、終生敬愛する上司であり友人でした。1881年3月、ニコライがパリで客死した報せに衝撃を受けたチャイコフスキーは、しばらくの間作曲への興味を失ってしまいました。この年の暮れ頃からニコライに捧げるためのピアノ三重奏曲に着手して、ほぼ1月で完成させました。

精神的、金銭的パトロンとしてチャイコフスキーの多くの創作を支えたナジェージュダ・フォン・メック夫人は、かねてからピアノ三重奏曲を作曲するよう求めていました。しかしチャイコフスキーは、「ピアノと弦楽器はバランスが悪く、ピアノを用いるのは独奏か管弦楽との協奏、または伴奏だけ」と退けていました。チャイコフスキーにとって、ピアノは1台で全宇宙を表現できる、それに対峙する2台の弦楽器はバランス的に力不足と思えたのでしようか。チャイコフスキーがピアノという楽器をどのように考えていたかを伝える興味深いエピソードです。思入へ献呈するためにチャレンジしたピアノ三重奏曲は、結果的にはピアノにかかる比重がたしかに大きいのですが、決してバランスを欠くことはなく、19世紀最後の極上のピアノ三重奏曲となりました。

チャイコフスキーが影響を受けた作曲家は、グリシカの他にモーツァルトやシューマンでしたが、ペリオーズやリスト、ブラームス、サン・サンスらロマン派を代表する作曲家たちとは実際に会っています。1876年8月には、評論の仕事のために第1回バイロイト音楽祭を訪れ、ヴァーグナー「ニーベルングの指輪」全四部作初演という歴史的な音楽的事件に立ち会いました。同時代の作曲家たちからの影響を表明していませんが、好むと好まざるに関わらず、時代の空気はチャイコフスキーを包んでいました。またチャイコフスキーの音楽は、トルストイをはじめルグーネフやチェーホフといった同時代の文豪たちからも支持されました。伝記や手紙、作品表を眺めていると、私たちがチャイコフスキーについて知っていることはほんのわずかであると、興味深く思えます。ちなみに、チャイコフスキーはメック夫人と直接会うことはありませんでしたが、夫人が音楽教師として雇ったフランス人は、ピュッシーでした。ピュッシーは、メック夫人やその子供たちとチャイコフスキーの作品を連弾して楽しんだとのことでした。

Pyotr Il'yich Tchaikovsky

カタカナ表記→ ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー
チャイコフスキーのアルファベット表記の方法はいくつかありますが、ここではPyotr Il'yich Tchaikovsky と表記します。